

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著、 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概 要
(著書(欧文)) 1.				
(著書(和文)) 1. 知のユーラシア5 交錯する東方の知	共著	2014年2月	明治書院	「水戸の学問と春秋の思想」(p133-157)を執筆。光圀の藩主就任、『大日本史』の編纂、慶喜の大政奉還江など、江戸時代を通じての水戸の学問を春秋学の側面から検討した。
2. 『はじめて学ぶ中国思想』	共著	2018年4月	ミネルヴァ書房	中国思想初学者のために編纂された『はじめて学ぶ中国思想』にて、「王陽明」「顧炎武」「黄宗羲」「章学誠」「大学」「中庸」を執筆した。
(学術論文(欧文)) 1.				
(学術論文(和文)) 1. 清代浙東史学の展開 (修士論文)  2. 萬斯同の廟制説  3. 萬斯同の禘祫説	単著   単著   単著	1997年3月   1998年1月   1998年3月	筑波大学   『哲学・思想論叢』 第16号 p. 9-20   『筑波中国文化論叢』17 p. 29-43	清代浙東史学に連なる学者、黄宗羲・萬斯同・萬斯大・章学誠の史学思想について検討した。  清代の浙東学者萬斯同の思想の一端を明らかにするために彼の廟制説について検討した。まずは、漢代における廟制問題と、それに関する經学史上の問題を考察し、經学史的には王肅派と鄭玄派に分かれて議論が展開されていることを確認した。ついで、萬斯同の廟制は九廟を主張する王肅的な説であり、それは明代の歴史的事実が九廟説に基づいており、であり、歴史的事実を整合的に解釈しようとしたためであったことを明らかにした。  清代浙東学派に属する萬斯同の思想を明らかにするため、彼の祭天思想、特に禘祫説について検討した。皇帝の大本の祖先まで遡って祭る禘と祫は、經学史的には鄭玄説と王肅説をベースとして複雑な問題となっていた。歴史的には宋代以降は王肅説が採用され祭天が行われていた。萬斯同の説は王肅的な説であったが、それは明の祭祀が王肅説をもとに行われていたからであり、その正当性を証明するためであったことを明らかにした。

4. 消えた元王朝－萬斯同の『庚申君遺事』について	単著	1999年3月	『筑波中国文化論叢』18 p. 129-146	清代浙東学派に属する萬斯同の思想を明らかにするため、彼の著書である『庚申君遺事』についての検討を行った。この書物は、元朝最後の皇帝順帝が、南宋最後の皇帝恭帝の子であるという伝説を、萬斯同が圖讖などの説を利用して支持するものであった。それは実証性を重視する彼の立場からするとあり得ない論理操作であったが、それは、異民族王朝の元王朝を歴史的に抹殺するための操作であり、そこに明の遺民としての萬斯同がいることを明らかにした。
5. 明代一帝一后制と太廟	単著	2001年3月	『筑波中国文化論叢』20 p. 29-55	明代の太廟制度、特に皇帝の生母の祭祀のあり方について検討した。儒教は理想的には一夫一婦制度であったが、現実的には多くの側室がいた。それは祭祀を継承させるためが必要であったからであるが、そこに正室ではない生母の祭祀が問題となっていた。世宗は生母は太廟ではなく、別殿で祭り、孫の代でその祭祀はやめるとし、太廟では皇帝と皇后を対として祭るとし、儒教理念を体現した廟制度を確立したことを明らかにした。
6. 徳川光圀生母の合葬問題と朱舜水	単著	2001年12月	『大久保隆郎教授退官記念論集』p. 747-770	水戸藩二代藩主、徳川光圀は瑞龍山に水戸藩の墓所を造営し、儒葬で彼の父である頼房と母久子を葬った。母久子は頼房の側室であるため、頼房と合葬するか否かが問題となった。頼房には正室がなく、光圀のブレインであった朱舜水は「母は子を以て貴し」の理論のもと合葬を主張したが、結局は同じ敷地内で別々に墳墓が築かれた。そこには名分を重視する光圀の思想がみられることを明らかにした。
7. 注疏における五行神と社稷神について	単著	2007年6月	『中国文化』第65号 p. 1-14	儒教経典である『礼記』と『周礼』には城の中央に土神である社と稷を祀り、東西南北にそれぞれ木・火・金・水の神を祀ることが記されている。この五行神と社稷神を誰に配当するのか、儒教経典は様々な解釈の余地を残しており、唐代『礼記』に注釈を施した孔穎達と『周礼』に注釈を施した賈公彦にも見解の違いが見られる。それはそれぞれ独自に神々の世界を整合的に解釈しようとした結果であることを明らかにした。(pp. 1-14)

8. 浙東の禮學 —萬斯大『學禮質 疑』の世界像	単著	2008年10月	『日本中国学会報』 60集 p. 196-210	清代の浙東学者、萬斯大の『学礼質疑』から彼の礼学思想の検討を行った。萬斯大の経書解釈には天の運行が根底にあり、周の礼は天の運行に従っていると解釈された。その考えのもと周代の家族制度を示したとされる宗法も解釈され、宗法は天の理念によって整然と論理化された。それは当時、浙東地方にあって喫緊の問題であった家族の存続に対して盤石の基盤を与えるものであり、それによって一族の永遠の結合を図ろうとしたのであった。 (pp. 196-210)
9. 近世日本における葬 祭儀礼に関する一考 察	単著	2010年3月	堀池信夫編『宋学西 遷Ⅱ—中国イスラ ム哲学の形勢』— (平成20年度～平成 21年度科学研究費補 助金(基盤研究 (B))研究報告書 P. 61-70	近世日本における社会秩序の成立に関して、仏教の葬儀法要の普及とそれに対する儒教の影響について検討した。儒教はその思想の根底にある祖先崇拜の理念を普及するために葬儀と祖先祭祀を重視しており、中国では朱子『家礼』が葬祭儀礼を簡略化したことにより、庶民にまで葬祭が普及していた。日本では江戸時代、仏教による葬祭が義務化されたが、それはほぼ『家礼』の形式を利用していた。それが近世日本に儒教理念が普及した一因となったことについて考察した。
10. 朱熹『家礼』におけ る祠堂の機能	単著	2010年6月	『中国文化』第68号 P27-39	朱熹の『家礼』において中心的役割を担う祖先祭祀の場である祠堂の意義と機能について検討した。『家礼』は複雑であった儒教儀礼を簡略化し、庶民にも実行可能な儀礼を示すものであった。祖先祭祀も、祠堂で祖先を前にして宗子を中心として、子孫が秩序だって、祖先と宗子に敬意を払うことを示したが、それはそれによって家族内の秩序を形成し、さらには社会秩序の基盤の形成を図るものであったことを明らかにした。(pp. 27-39)
11. 水戸のパワースポッ ト—水戸弘道館鹿島 神社・八卦堂・孔子廟 の空間構造—	単著	2011年7月	堀池信夫編『知の ユーラシア』(明治 書院, 2011), P325— 44	水戸弘道館の聖域にある鹿島神社・八卦堂・孔子廟は、建葉槌命を祀った常陸二宮静神社と、日本武尊を祀った三宮吉田神社、徳川家康を祀った水戸東照宮、そして建葉槌命と天津甕星を祀った大甕神社を結ぶラインの中心に配置されている。それは儒教の都市構造の理論である五行神と社稷神の考えによるものであり、それらの神社に祀られている祭神を四方の神として見立て、中央に位置する場所に弘道館を建設し、常陸の一宮鹿島神宮の祭神である建御雷神を祀り、政治教育の中心にする意図があったことを明らかにした。 (pp. 325-344)

12. 會澤正志齋の『中庸釋義』について	単著	2015年6月	『中国文化』第73号	<p>会沢正志齋の『中庸積義』について検討を行った。会沢は『中庸』を道を修めるための教えが記された書と捉え、己を成し、物を成し、外内を合致して誠になるための聖人の教えが全篇を通して記されているとした。学問の目的は誠になることとされ、それにはまずは知の徳によって善を明らかにし、仁の徳で善を行い、勇の徳で善を完成し、自らを修め、その上で民に臨み、礼を作成し、その礼に民を従わせることが、道の完成であり、誠になることとされたのである。(pp. 79-91)</p>
13. 日本近世における主忠信説の一展開 — 会沢正志齋を中心に —	単著	2018年6月	『中国文化 — 研究と教育 —』76号	<p>本論文では、会沢正志齋の「主忠信」説を中心に検討した。会沢は学問に臨む学者の姿勢として朱子の「主敬」を批判し、『論語』にみられる「主忠信」を提唱した。そこで、「主敬」「主忠信」に対する朱子、伊藤仁齋、会沢の説を検討した。その結果、会沢が自らの心に向き合う「主敬」よりも、相手の心を推しはかり行動する「主忠信」を重視したのは、社会の中で活躍する人材を育成するためであったことが判明した。pp. 39-52</p>
14. 会沢正志齋の「天」について — 一元氣論を中心に —	単著	2020年6月	『中国文化 — 研究と教育 —』78号	<p>会沢正志齋の天の概念について、万物の始元の側面から検討を加えた。会沢は万物の始元を韓康伯・孔穎達が主張した無や、朱熹が想定した観念的な理とする説を否定し、万物の始元を混沌としたひとつの状態である一元氣だとし、それが太極であるとする説を唱えた。この会沢の理論は『日本書紀』冒頭、およびその後にある学術思想から導き出されたものであることを明らかにした。pp. 53-66</p>

<p>15. 続・会沢正志齋の「天」について—天と天照大神—</p>	<p>単著</p>	<p>2021年6月</p>	<p>『中国文化 —研究と教育—』79号</p>	<p>先に、会沢正志齋の天について主に始元の点から検討した。しかし、会沢は天と天照大神が一体化した天祖という概念を根本にして自らの思想を展開している。そこで本稿では、彼がどのような理論で天と天照大神を一体化したのか検討した。</p> <p>会沢にとって、天とは万物を生み出す始元であるとともに、世界を秩序づける造化の作用であった。全宇宙における天の作用が天道とされ、人間社会においては人道とみなされた。人道は人々の日常の行動の中に自ずと生ずる秩序であり、本来、各人が天命の性に率うことで実現できるはずであった。しかし、人には賢不肖の違いがあり、その実現は人々の自発的行動に期待はできない。そこで、人々の行動の中から中制を抽出し、礼を制作して、人々を人道へと導く聖人が必要とされた。</p> <p>学問の目的はこの聖人の域に達することであり、学問で自らを聖人の域にまで高め、民を人道へと導くことが学者の使命とされた。しかし、学問でも到達できない境地があり、それが不思不勉、従容中道の至誠なる聖人の境地であった。この至誠なる聖人のはたらきが、天地の造化の作用と一致するとされた。会沢にとって、天照大神は、まさしくこの至誠なる聖人であった。かくして、会沢は永遠に天位にあり続ける皇祖神として天照大神を天と一体化し、自らの理論を構築したのである。 pp. 67-80</p>
------------------------------------	-----------	----------------	--------------------------	---

<p>16. 会沢正志斎の經学思想における術数学について</p>	<p>単著</p>	<p>2022年6月</p>	<p>『中国文化 一研究と教育』80号</p>	<p>儒教は前漢の董仲舒以来、天人合一思想がその根底にあり続けている。天人合一思想とは、天と人とは同質・同類であり、感応しあうという考えを基本とし、それを担保にして倫理、政事を構築していこうとするものであった。この天人合一思想の理論は、易学を基本とする占術と自然科学とが混合した術数学という学問によって構築されている。会沢正志斎の經学思想にも、天人合一思想がその根底にあり、術数学が何らかの影響を与えていると考えられる。そこで、本稿では、術数学の中核を形成している易と五行、そして自然科学に対する会沢の認識を検討し、彼の經学思想に対して術数学的思考がどのような影響を与えていたのか考察した。</p> <p>術数学は漢代以来、暦学や音楽理論によって導出された数理によって經書の内容を担保しようとするものであり、すべてが經書に記されたものから導き出されたものではない。会沢の經学は儒教の伝統である天人合一思想を基本とするものの、その学問は經書で經書を解釈する文献学的アプローチに基づいており、民用を重視し、人倫の解明を目指す政治論が中心であった。そのため、会沢は、その天人合一の理論を『易経』や『孝経』の思想、および『書経』などに記された民用に関する五行の記述によって構築しており、漢代以降に発達した数理に基づいた術数学による解釈に対しては批判的であったことが明らかとなった。</p> <p>pp58-71</p>
<p>(紀要論文) 1. 萬斯大『学春秋随筆』の世界観(上)</p>	<p>単著</p>	<p>2005年10月</p>	<p>『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』23巻第1号 p. 43-56</p>	<p>清代浙東学派に属する萬斯大の思想を明らかにするため、彼の『学春秋随筆』について検討した。彼は『春秋』を権力が王から大夫へと移っていく様子が記されている書物と捉え、その原因は女性がいると検証していた。また、『学春秋随筆』は昭公二十五年で終わり、哀公についての記述はない。それは彼が亡くなり絶筆となったからであるが、最後の条で悪は尽くされたとし、善なる世への回帰を願って筆を終えていることを明らかにした。</p>

<p>2. 会沢正志齋の祖先祭祀の思想</p>	<p>単著</p>	<p>2012年10月</p>	<p>『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』30巻第1号, P1-10</p>	<p>会沢正志齋の『新論』から彼の祖先祭祀の思想について検討をした。会沢は自らの根本を祖先としてその祭祀を人々に行わせることで、人々が持つ死に対する恐れ・不安を解消し、さらにそれによって人々に目上に対する敬の意識・行動を植えつけることを図った。それは最終的にはその敬意を万物の根本である天に向かわせることによって、天すなわち天子に対して統一的な行動を取らせるよう図るものであった。 (pp. 1-10)</p>
<p>3. 会沢正志齋の祭天思想</p>	<p>単著</p>	<p>2013年3月</p>	<p>『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』30巻第2号, P111-124</p>	<p>会沢正志齋の思想を天の祭祀を軸として検討を行った。会沢の思想は儒教の伝統に基づき天を根本とするものであった。ただし、会沢の措定する天は祖と一体化した天祖であり、天祖は天照大神とみなされた。天皇は大嘗祭で天祖を祀ることで、天祖の権威が付与され、それに参加する群臣もまた天照大神に仕える神々と同定された。それによって日本では神代の秩序が今の世において維持されているとみなされ、その天皇を頂点とする秩序こそが国体とされたのであった。 (P111-124)</p>
<p>(辞書・翻訳書等) 1. 『朱子語類』訳注 — 卷三十二論語十四 雍也篇三 (その1) — 2. 會澤正志齋『中庸釋義』訳注校(1)</p>	<p>単著  単著</p>	<p>2011年3月(予定)  2014年10月</p>	<p>堀池信夫編『宋学西遷Ⅱ—中国イスラーム哲学の形勢』— (平成20年度～平成21年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究報告書  『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』第32巻第1号</p>	<p>『朱子語類』卷三十二論語十四雍也篇三の訳注を作成した。  後期水戸学の中心的人物の一人である会沢正志齋の『中庸積義』の訳注の作成を通して、彼の経学思想の一端を検討することにした。本稿では、『中庸積義』の章立てを示し、朱熹の『中庸章句』の章立てとは異なることを示し、『中庸積義』序、ならびに一章、(章句一章)の訳注を作成し、彼の『中庸』解釈が経によって経を解釈する方法をとり、多くの経書を参考としつつ、独自の解釈を導き出していることを示した。</p>

3. 會澤正志齋『中庸釋義』訳注校 (2)	単著	2015年3月	『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』第32巻第2号	會澤正志齋の『中庸釋義』の二章 (5節～12節) (章句では二章から十一章) の訳注を作成し、あわせて彼の思想について考察した。7節「舜は夫れ大知なるかな……」では、會澤は『易經』小過・大過・恒・乾卦象伝など『易』を多く引用し解釈していた。彼の『易經』理解も独自のものであるため、彼の易經解釈書である『読易日札』によって、會澤の『易』の思想とともに、彼の『中庸』解釈について検討した。
4. 會澤正志齋『中庸釋義』訳注校 (3)	単著	2015年9月	『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』第33巻第1号	會澤正志齋『中庸釋義』の三章 (13節～15節) および四章の一部 (16節、17節) (章句では二章から十一章) の訳注を作成し、あわせて彼の思想について考察した。14節では『書經』皋陶謨「人を知り民を安んずる」、『論語』雍也篇「如し博く民に施して能く衆を濟う……」が引用され、それぞれ『典謨述義』『読論日札』を検討し、彼の『書經』および『論語』解釈と『中庸』との関係について検討した。(pp. 94(二十五)-84(三十五))
5. 會澤正志齋『中庸釋義』訳注校 (4)	単著	2016年3月	『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』第33巻第2号	會澤正志齋『中庸釋義』の訳注を作成する中で、彼の經学思想について検討している。本稿では、(余説)において「會澤正志齋の『易』乾卦の解釈と『中庸』について」を執筆し、会沢の『易經』乾卦に対する解釈とその『中庸』解釈への影響を検討した。会沢は易の乾卦には改革に向けての道が記されているとし、乾卦の各爻をそれぞれの段階での生き方として解釈をし、それに基づいて『中庸』の「君子、其の位に素して行い、其の外を願わず……」を解釈していたことを明らかにした。(pp. 180(一)-166 (十五))
6. 會澤正志齋『中庸釋義』訳注校 (5)	単著	2016年10月	『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』第34巻第1号	會澤正志齋『中庸釋義』の四章 (20節、21節) (章句では十五・十六章) の訳注を作成し、あわせて彼の思想について考察した。20節「君子の道は辟 (たと) うれば……」は『大学』における「齊家」が論じられているとし、「齊家」の根本が20節の「親に順」なることであるとする。続く21節「鬼神の徳為る……」は「親に順」なる要が「鬼神 (祖霊)」に対する「誠」なる行動であるとし、これがその後の「誠は天道」を導いているものと説く。(pp. 124(一)- 117(八))



7. 會澤正志齋『中庸釋義』訳注校 (6)	単著	2017年3月	『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』第34巻第2号	會澤正志齋『中庸釋義』の四章 (22節～24節) (章句では十七・十六章) の訳注を作成し、あわせて彼の思想について考察した。ここでは、主に會澤は「孝」を強調して説いており、彼の『孝経考』とともに彼の「孝」の思想について、主に検討し、彼は「仁」の根本が「孝」であり、親に対する「愛敬」こそが「孝」の本質であるとして、「孝」を根本として彼は思想を展開していることをあきらかにした。(pp. 180(一)-179(五))
會澤正志齋『中庸釋義』訳注校 (7)	単著	2017年9月	『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』第35巻第1号	會澤正志齋の『中庸釋義』(25節～28節, 章句19章, 21章に該当) の訳注を作成した。本稿では會澤の宗廟思想と祭天思想を中心に検討を行った。P92 (四十九) -P78 (六十三)
會澤正志齋『中庸釋義』訳注校 (8)	単著	2018年3月	『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』第35巻第2号	會澤正志齋の『中庸釋義』(29節～33節, 章句208章に該当) の訳注を作成した。本稿では會澤の政治思想を中心に検討を行った。P112 (一) - P97 (十五)
會澤正志齋『中庸釋義』訳注校 (9)	単著	2018年9月	『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』第36巻第1号	會澤正志齋の『中庸釋義』(34節～36節, 章句20章に該当) の訳注を作成した。本稿では『中庸』の「誠者典之道也。誠之者人之道也」を中心に、會澤の誠の思想の検討を行った。会沢は「誠之者人之道也」を重視し、『中庸』は学問によって誠を目指すために記された書物であるとみなしていたことが判明した。pp66 (四十五) -54 (五十七)
會澤正志齋『中庸釋義』訳注校 (10)	単著	2019年3月	『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』第36巻第2号	會澤正志齋の『中庸釋義』(37節～46節, 章句21-26章に該当) の訳注を作成した。本稿では『中庸』「誠者非自成己而已也。所以成物。成己仁也。成物知也。性之徳也。合外内之道也」を中心に検討した。会沢の思想の根底にはこの『中庸』の言葉があり、会沢は学問によってまずは自分自身を修め、その自己をもって社会の諸問題に臨むことを求めたことが判明した。pp132 (二十一) -117 (三十六)

<p>會澤正志齋『中庸釋義』訳注校 (11)</p>	<p>単著</p>	<p>2019年9月</p>	<p>『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』第37巻第1号</p>	<p>會澤正志齋の『中庸釋義』(47節～55節, 章句27-29章に該当)の訳注を作成した。ここでは、會澤は政治における礼の重要性を説く。政治は万民に天与の性に従った道を実践させることが要点であり、君子は自らの性を自覚しつつ、学問によって道を極め、道を人々に実践させるために具体的行動規範として礼を制定し、人々は礼に従い行動することで自ずと道を実践することとする。また、そのためには「徳」「位」「時」が重要であり、三者が備わって、はじめて礼は機能するとした。pp146 (27二十七) -131 (四十二)</p>
<p>會澤正志齋『中庸釋義』訳注校 (12)</p>	<p>単著</p>	<p>2020年3月</p>	<p>『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』第37巻第2号</p>	<p>会沢正志齋の『中庸釋義』56節～63節(章句では三十章「仲尼祖述堯舜……」、～三十三章「詩曰衣錦尚絅に相当)の訳注を作成した。会沢は56節～61節には会沢は「論孔子脩道」、62・63節には「通論本篇之帰趣」と章立て、これらの章は主に孔子の行った事業とその事業に臨んだ孔子の心が至誠であったことが述べられているとし、さらに最終章では、至誠の心で事業に臨むとはいかなるものであるのかを『詩経』の言葉で語り、『中庸』を結んでいるとする。</p>
<p>(報告書・会報等)</p>				
<p>1. (国際学会発表)</p>				
<p>(国内学会発表)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 浙東史学の展開の展開一章学誠を中心に</li> <li>2. 萬斯同の礼説一廟制と禘祫</li> <li>3. 萬斯同の禘祫説について</li> <li>4. 萬斯大『學禮質疑』における祭祀の構造について</li> <li>5. 萬斯大の祭天思想について</li> </ol>		<p>1996年6月</p> <p>1997年11月</p> <p>1997年11月</p> <p>2006年10月</p> <p>2006年6月</p>	<p>大塚漢文学会 於 湯島聖堂</p> <p>筑波中国学会月例会 於 筑波大学</p> <p>大塚漢文学会月例会 於 筑波大学学校教育 部</p> <p>日本中国学会 於 北海道教育大学函館文 公</p> <p>中国文化学会 於 大 東文化大学</p>	<p>清代の浙東史学思想の特徴を、その代表的人物である章学誠の「六経皆史」を中心にして発表した。</p> <p>『明史』の中心的編纂者であった萬斯同の歴史思想を礼学の視点、特に廟制の解釈について検討し、その成果発表した。</p> <p>萬斯同の歴史思想を明らかにするために、彼の思想の基盤となっている礼学、特に禘祫説について発表した。</p> <p>『學禮質疑』の中に見られる萬斯大の禘説と祖先祭祀の説に見られる構造について発表した。</p> <p>『學禮質疑』に記される暦・天の祭祀・宗法・宗法から、萬斯大の思想に貫かれている天の思想について発表した。</p>

6. 『家礼』の空間構造と葬式仏教		2009年6月	中国文化学会 於大東文化大学	朱熹『家礼』と仏教の葬送儀礼および祖先供養の関係・影響について発表した。
7. 會澤正志斎の『中庸釋義』について		2014年6月	中国文化学会 於北海道教育大学札幌	會澤正志斎の思想を『中庸釋義』から検討し、彼の『中庸』解釈に貫く思想について発表した。
(演奏会・展覧会等) 1.				
(招待講演・基調講演) 1. 『大学』三綱領八条目について		2019年11月	北海道教育大学旭川校国語国文学会第35回研究発表大会	北海道教育大学旭川校 国語国文学会研究発表大会にて、小中学校の現役教員、教員を目指す学生に向けて、「『大学』三綱領八条目について」の題目で講演を行った。朱子学の学問の目的は明德を明らかにすること、すなわち見失ってしまった自らの心を回復し、さらにすべての人にそれを実現させることであり、それを達成するには、まずは自分のために勉強しなくてはならないことを、『大学』冒頭、および『中庸』冒頭と二十章「誠者天之道也」を踏まえて解説をした。
(受賞(学術賞等)) 1.				

研 究 活 動 項 目

助成を受けた研究等の名称	代表, 分担等の別	種 類	採択年度	交付・受入元	交付・受入額	概 要
(科学研究費採択) 1. 宋代春秋学の基礎的研究	代表	若手B	2007	日本学術振興会	900,000	朱子学における春秋学の影響を検討するために、胡安国の『春秋伝』を翻訳し、その思想の背景にあるものを検討した。
2. 宋代春秋学の基礎的研究	代表	若手B	2008	日本学術振興会	600,000	宋代の学問的背景には、家族の離散問題があることが判明し、家族の利益を擁護するために経書が解釈されていることが判明した。
3 会沢正志斎の経学思想研究	代表	基盤研究(C)	2020～2024	日本学術振興会	3,000,000	後期水戸学の思想形成において中心的な活躍をした会沢正志斎の経学思想について検討し、後期水戸学の思想の根底にある儒教思想がいかなるものであったのかの解明を目指す。

(競争的研究助成費獲得(科研費除く)) 1.						
(共同研究・受託研究受入れ) 1.						
(奨学・指定寄付金受入れ) 1.						
(学内課題研究(共同研究)) 1. 「水戸弘道館聖域の空間構造に関する学際的研究」	代表	—	2020年度 ～2022年度	—	2,468,000	弘道館の八卦堂は戸藩が重視する神々の中心に設置されている。本研究は、その理論的根拠、歴史的経緯、技術的背景などを学際的研究によって明らかにしていくものである。
(学内課題研究(各個研究)) 1. 近世水戸地方における葬礼と祖先祭祀についての研究	代表				300,000	近世水戸地方の葬祭儀礼と祖先祭祀の成立について検討し、調査の際に水戸地方の特殊な神社の配置に気づき、その思想的背景を上記の「水戸のパワースポット—水戸弘道館鹿島神社・八卦堂・孔子廟の空間構造—」および「会沢正志斎の祖先祭祀の思想」で発表した。
2. 会沢正志斎の経学思想研究	代表		2016年度		398,000	会沢正志斎の経学思想を、主に彼の著書『中庸釋義』の訳注作成を通じて明らかにしていく。2016年度の成果は『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』第34巻第1号2号で発表した。
会沢正志斎の経学思想研究	代表		2017年度		303,000	会沢正志斎の経学思想を、主に彼の著書『中庸釋義』の訳注作成を通じて明らかにしていく。2017年度の成果は『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』第35巻第1号、2号で発表した。
会沢正志斎の経学思想研究	代表		2018年度		207,000	会沢正志斎の経学思想を、主に彼の著書『中庸釋義』の訳注作成を通じて明らかにしていく。2018年度の成果は『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』第36巻第1号、2号、『中国文化—研究と教育—』76号にて発表した。
会沢正志斎の経学思想研究	代表	特別奨励研究	2019年度		313,000	会沢正志斎の経学思想を、主に彼の著書『中庸釋義』の訳注作成を通じて明らかにしていく。2019年度の成果は『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』第36巻第1号、2号、『中国文化—研究と教育—』76号にて発表する予定である。

(知的財産(特許・実用新案等)) 1.	—			—	—	
------------------------	---	--	--	---	---	--